

寝殿造住宅における植栽の特性に関する一考察

仲 隆裕・藤井英二郎・浅野二郎*
(環境植栽学研究室・*千葉大学名誉教授)

A Study on the Planting Design in the Shinden-Style Residence

Takahiro NAKA, Eijiro FUJII and Jiro ASANO*
(Laboratory of Planting Design, *Emeritus Professor)

ABSTRACT

This study is concerned with planting design in Shinden-style residence.

Chapter I. Planting design was constructed as a ceremonial part in the Shinden-style residence. In the middle of Heian period, the outdoor space of Shinden-style residence; "Shinden-Style Garden" was conducted by means of topographical conditions. So, planting design was constructed by a physical part of nature.

Chapter II. According to the result of excavation studies in "Saga-in" and "The Heian-kyo, U-kyo, 3-jo, 3-cho", we discuss the mental relationship between plants and Japanese in the Heian period.

研究の課題と方法

住宅はわれわれの日常生活空間のなかで最も身近な空間であるといえる。住宅における緑地(外部空間)は、住宅建築(内部空間)の間取り、特に玄関・勝手口・居間や応接室とその構造、公道と住宅建築および敷地との位置関係などに対応して、その位置的・機能的な関係からおよそ3つに大別される。一般に門から玄関までの空間を前庭、居間や応接室など主要な部屋に深いかかわりをもつ主要な外部空間としての主庭(本庭)、勝手口まわりを中心としたいわゆるサービスヤード、これに付随した家庭菜園や果樹園などを含めた裏庭である。

いわゆる一戸建て住宅における外部空間の地割りの基本は以上のようなものであるが、今日の都市における地価急騰・住宅難の状況からみると緑地を伴わない住宅も増えてきているが、それはこれらのバリエーションとみることもできる。社会的・経済的条件さえ整えばこれらの住宅形態を願望する意識が根強いことからこのことは裏付けられる。

今日の和風住宅は書院造住宅の系譜を引いているものとされるが、この書院造住宅は寝殿造住宅から発展・展開して成立した様式であるとされる。書院造住宅における植栽の特性については、外部空間の特性とのかかわりにおいてこれまでにいくつかの問題について検討してきた¹⁾。本論文では、寝殿造住宅における植栽の特性について検討・考察する。

まず第1章では従来の研究成果および文献史料から、寝殿造住宅の外部空間特性とのかかわりにおいて植栽の特性を考察し、続いて第2章では埋蔵文化財の発掘調査により検出された平安時代の住宅植栽植物種を取りあげ、それら植物に対する当時の人々の意識について検討することとする。

1. 寝殿造住宅の外部空間の特性と植栽

1) 寝殿造の概要

寝殿造は、日本においておよそ9世紀から13世紀にかけて主流であった住宅である。しかし実際にその姿を現在もとどめている遺構は皆無であって、限られた文献等に基づいて後世に復元された京都御所や平安神宮にその面影を窺い知るに過ぎず、その成立・発展の実態は未だに研究途上にある。

天保13年(1842)、沢田名垂は『家屋雑考』²⁾を著し、日本の住宅を寝殿造と書院造との2つに分け、その定式を図示し説明を加えている。ただし、ここに描かれる寝殿造住宅は彼の故実研究において平安時代以来の各種史料を集大成し、理想的な絵として観念的に描き出されたものであり、もとよりこの絵の通りの住宅は実在していなかったものとされている³⁾。

寝殿を中核として、その東西に対屋があり、これが両翼となって直角に廊がのび、東西に2つの中門廊が開けられ、その先端に泉殿・釣殿がつく。寝殿の南には“中庭或ハ小庭”と沢田名垂が記すところの“南のひろにわ”があり、ここには南階を中心に対一の樹木が植えられて

いる。この白砂敷の南のひろにわの先には池泉があり、マツの生い茂った中島が築かれる。建物から見て対岸には背の高い針葉樹、サクラやカエデと思われる落葉樹の花木、マツなどが植栽されている。池への給水は遣水によって行われ、この水路は寝殿と東対屋の間を通り、東中門廊寄りに南に流れ池に注ぐ。これは当時、地相を見る上で考慮されていた陰陽五行の思想によって順流とされるものであり、涼しげなせせらぎを作り出していた(図1参照)。

ここに描き出される寝殿造住宅はおおよそ三位以上の上級貴族の住宅で、彼らの生活の場であるとともに年中行事の執行の場であった。貴族の日記にあらわれる寝殿造住宅の描写は、表門から南のひろにわに至る空間とこれに続く池泉、すなわち先の外部空間区分からすると前庭にあたる部分と主庭にあたる部分についてなされていることが多い。この主庭は寝殿造庭園と呼ばれる、いわゆる“ハレ”の空間で、主要建築の内部空間とあわせて儀式進行のための空間であった。

平安時代は、これまでの庭園史学上の成果によれば、おおまかに9世紀の100年を初期、10・11世紀の200年を中期とみて、およそ3期に区分される⁴⁾。寝殿造庭園はその中期、律令太政官制が薄れ、藤原氏による摂関政治が全盛を迎える時期において成立したものとされる。

このようなハレの空間に対しておそらくサービスヤード、裏庭にあたる外部空間が存在した筈であり、これらは日常生活空間としていわゆる“ケ”の空間と総称される。この“ケ”の外部空間における植栽の様子にふれた記録は少ないが、それは貴族の諸日記が儀式進行の様子を記録することに主眼がおかれたためであるとされる。

2) 寝殿造住宅における植栽

さて、寝殿造住宅のハレの空間における植栽の特性は、何といっても儀式にかかわる植栽であったということであ

らう。

白砂敷で構成される紫宸殿南庭においては、南階左右に配植される一对の樹木があり、右(西)にタチバナ、左(東)にウメが配されていた。この植栽は、ここで行われる唐礼を模した儀式と深くかかわるものであったと推測されるが、その機能については明らかではない。しかしながら、『三代実録』貞観16(874)年8月24日の条には「紫宸殿前の桜」とあって、左にはウメではなく現在の京都御所(紫宸殿)と同様にサクラが植えられていたものとみられる。このことは、宮廷儀式において唐風のいわば機能植栽が、国風的なものへと変容する一端を示すものとも考えられる。

貴族住宅である寝殿造において行われた儀式の種類と性格は、約400年に及ぶ平安時代の期間のなかでかなりの変遷を見た。そのような変遷のなかで儀式にかかわる植栽の変遷をあとづけることは現段階においては非常に困難である。ここではそのような課題の指摘にとどまるが、いわゆる寝殿造庭園は先にも触れたように律令太政官制から王朝国家(摂関政治)へという貴族政治の構造の大きな変化のなかで生まれ育って来たものととらえることができよう。寝殿の南には、紫宸殿と同様に白砂敷のひろにわを設けるが、その南に更に園池を設け、自然の風景を再現していたことが最大の特徴であった。

寝殿の南に園池を設ける形の住宅がいつから作られたものかは明らかではない。平安奠都間もなく作られた離宮・神泉苑にその姿をみることができるが、これは唐の宮殿建築にならったものとされ⁵⁾、自然の地形を利用した広大な苑池をあわせもつ空間であった。神泉苑は天皇・貴族の遊宴の場としておおく使われ、嵯峨天皇が弘仁3年(812)2月、ここで催した観花の宴は花見の節会のさきがけともなった。そのほかにも離宮・後院が郊外の風光明媚な地に設けられ、内裏とは異なった利用がなされていた。

藤原摂関家の寝殿造住宅においては、国家的儀式や私的な儀式が盛んにおこなわれていた。園池の植栽は、これら儀式のいわば舞台装置として背景を構成するものであると指摘される。ここにおける植栽は、たとえば『大鏡』太政大臣実頼の項によれば、小野宮殿において「御前の池よりあなたをはるばると野につくらせたまひて、時々花、紅葉を植ゑたまへり」とあって⁶⁾、池の対岸に四季の草花や紅葉する樹木を植栽するものであった。本中真(1983)氏はこのような空間構成の態度について、「寝殿造住宅庭園は、形態的に自然と連続していることを想像させるだけでなく、自然風物の即物的移築、再配置を作庭意識の根底にすえていることから両者の質的な隔差も認められない⁷⁾」としており、この態度は貴族の“前

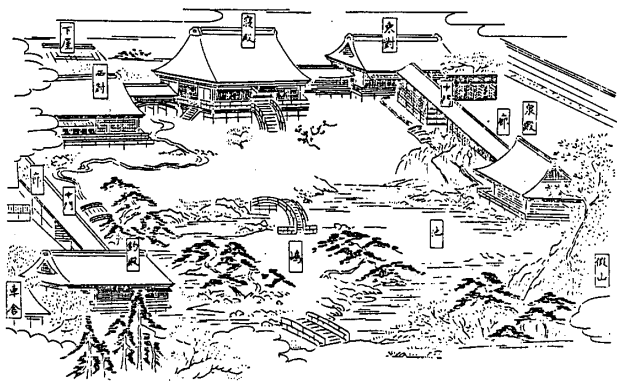


図1 家屋雑考所蔵の寝殿造模式図

栽合わせ”という、左右に組分けをして自然風景を模して植え込みをつくることを競う遊びにもみられる、としている。

そのように考えれば、ここにみられる植栽は自然植生の再現を目的としたものであったといえるが、しかしそれはある種の判断に基づいて特定の自然を再現していたものであって、今日にいう植物生態学に基づく生態植栽とは意味を異にする。いわば心象風景の再現であって、さらに本中氏が指摘するように「個々ばらばらな風物としての自然を身近にひきよせて楽しむ」こととなっていた。つまり、そこには当時の人間の自然観が反映されていたと考えられる。マツの植栽がなされていることも、寝殿造庭園全体の造形のモチーフが海洋表現にあり、州浜や荒磯にとりあわされていたことからその一端が窺える。

このような自然風景の再現のための植栽の著しい例が『源氏物語』（乙女）の光源氏の六条院・四季の庭の情景にみられる⁹⁾。それは、春の庭は花の山、夏の庭は木陰と山里、秋の庭は野辺と紅葉の山、冬の庭は松と深山の趣をもつものであった。すなわち、泉や遣水、池や築山といったもので庭の骨格をつくり、これに特定の植物を移し植え、育むことによって、邸宅内に本来移り変わるべき四季を常時つくりだしていたのであった。これは小説の世界の四季の庭であるが、実際に高陽院は四季の庭であったという。寝殿造庭園について述べられた『作庭記』⁹⁾には谷川の様、大河の様などにかたどった遣水の作り方が示され、「遣水のほとりの野筋には、おほきにはびこる前栽をうふべからず。桔梗、女郎、われもかう、ぎぼうし様のものをうふべし」とあって、遣水のほとりの野筋に植栽する植物について述べられている。それは、キキョウ、オミナエシ、ワレモコウ、ギボウシといった草本類であり、おおきくはびこることのないものが良いとされている。これは秋の野の風情をつくりだす植栽であった。兼好法師も徒然草第72段¹⁰⁾で前栽に石・草が多いのは下品である、と述べており、作庭記と共通した美意識を示している。

以上述べてきたように、寝殿造住宅においては儀式のための植栽が行われたのであるが、その内容は内裏において要求されたような唐風の植栽からのちに大きく展開し、日本のある特定の風景を再現する要素が強く含まれるようになったものとみられる。

2. 発掘調査成果にみる植栽

1) 嵯峨院における植栽

ここでは寝殿造住宅成立に先立つ平安時代初期の住宅の植栽についてみる。

現在の大覚寺はかつて嵯峨院といい、嵯峨天皇が弘仁14年(823)に譲位ののち、太上天皇として承和9年(842)に亡くなるまですごした後院の旧跡である。ここには唐風の宮殿建築と舟遊のための広大な苑池があったものと思われる。苑池はほぼ現在の大沢池として残されているが、建物遺構は確認されておらず、植栽の実態もよくわからない。しかしながら現在、名古屋滝の滝石組から大沢池にむかってゆるやかに流れる遣水遺構の発掘調査およびその整備がすすめられており、遣水遺構の堆積土から検出された植物遺存体から当時の植栽の実態の一端を窺うことができる。発掘調査は大沢池整備委員会の指導の下で、大覚寺・奈良国立文化財研究所・京都府教育庁および京都市文化観光局が行った。植物遺存体の調査は1988年秋に(財)京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏の協力のもとに行った。後者の調査方法は、遺構の堆積土層別に土壌サンプルを採取(5リットル程度)し、1mmメッシュのふるいで水洗し、バットに展開して植物遺存体を採取するというものである。なお、ここでは木本類について考察することとする。

遣水遺構の堆積土は4層に分けられる。植物遺存体の分析が行われたのは最下層の暗青灰砂礫、第2層の暗灰粘質土、第3層の黒褐色粘土についてである。遣水遺構の変遷との関係で検討してみると、これらは出土遺物や前後の堆積状況からみて9世紀前半のもので、嵯峨天皇の離宮・嵯峨院の時期の遣水に堆積した土層と考えられる。

まず最下層の暗灰砂礫は当初、水が比較的速い流速をもっていたことを示している。底面には景石が据えられていた可能性はあるものの、大半は素堀のままである。ここには遺物はほとんど含まれないが、ムラサキシキブの核、イヌザンショウの種子が検出されている。

第2層からは平安時代前期の緑釉陶器片をはじめとする多量の遺物が出土した。キイチゴ属の核、スモモの核、クサギの核、ムラサキシキブの核、カジノキの核、アカメガシワの種子、ブドウ属の種子、タラノキの核が検出されている。

第3層の黒褐色粘土は遣水が一時滞留してよどんでいたことを示している。藤原公任の和歌によれば、平安時代末期には滝水が枯れていたことが推測され、この時期によどんだものとも考えられる。この堆積土からは二葉マツの種子、ナシ属の種子、キイチゴ属の核、ウメの核、モモの核、エゴノキの種子、クサギの核、ムササキシキブの核、ガマズミ属の核、クワの核、カジノキの核、サンショウの種子、イヌザンショウの種子、アカメガシワの種子、ブドウ属の種子、タラノキの核が検出されている。

以上を一覧に示したものが表1である。各樹木の樹高・花期といった性質についてはおおその目安として北村四郎・村田源(1979)『原色日本植物図鑑・木本編』より付記した。

さて、『文華秀麗集』には、嵯峨院を舞台に揚柳、松、梅、竹、松が詠まれている。当時の文章作法においては漢詩、たとえば『芸文類聚』といった書物を念頭においた文飾をし、唐文化にひたったという指摘¹¹⁾もあり、詩にある植物が詠まれているからといっていちがいにこれが事実を反映したとみることは避けねばならない。しかしながらウメ、マツ、モモについては当時の植物遺存体

が残存しており、邸宅内に植栽されていたことは事実であろう。「窓を抱く梅」との表現から建物近くに梅が植栽されていたと考える向きもある。ウメは建物の軒近くに植栽される数少ない高木のうちのひとつであって、「隔廉梅」のように廉のすぐ際に植栽される例がある。

また、中国文化へのあこがれから、邸宅内にタケやキク、シダレヤナギを植栽したであろうことは十分に考えられ、特にキクについては嵯峨御流として現在も伝えられている。シダレヤナギについても平安京のメインストリートである朱雀大路を飾る植栽として採用されていたことが『続日本後記』¹²⁾にみえる。

表1 88年度7EDK(大覚寺遣水遺構)出土木本分類1

番号 和名	樹高	花期	出土部位	黒褐色粘土	暗灰粘質土	暗青灰砂れき
針葉樹						
2葉マツ*1	35	4-5	種子	○	—	—
落葉広葉樹						
花木						
ナシ属	25	4	種子	○	—	—
キイチゴ属*2	2	5-6	核	○	○	—
ウメ	10	2-3	核	○	—	—
スモモ	8	4	核	—	○	—
モモ	5	4	核	○	—	—
エゴノキ	8	5-6	種子	○	—	—
クサギ	4	8-9	核	○	○	—
ムラサキシキブ	3	6-8	核	○	○	○
ガマズミ属*3	4	5-6	核	○	—	—
その他						
クワ	12	4-6	核	○	—	—
カジノキ	16	5	核	○	○	—
サンショウ	3	4-5	種子	○	—	—
イヌザンショウ	2	7-8	種子	○	—	○
アカメガシワ	10	7	種子	○	○	—
ブドウ属*4	ツル	6-8	種子	○	○	—
タラノキ	4	8	核	○	○	—

科の順位は『牧野新日本植物図鑑』(1961)、樹高、花期、出土部位の名称は『原色日本植物図鑑木本編』北村、村田(1979)によった。

*1 アカマツを参照

*2 クサイチゴを参照

*3 ガマズミを参照

*4 エビズルを参照

7EDK 大覚寺遣水遺構出土植物遺体(木本の性質による分類)

木本の性質	黒褐色粘土	暗灰粘質土	暗青灰砂礫
針葉樹	1科1属1種	0種	0種
常緑広葉樹	0種	0種	0種
落葉広葉樹	9科15属15種	6科8属8種	2科2属2種
(花木)	(4科8属8種)	(2科4属4種)	(1科1属1種)
(その他)	(5科7属7種)	(4科4属4種)	(1科1属1種)
計	10科16属16種	6科8属8種	2科2属2種

表1の植物をみると、薬用の植物や、クワのように養蚕に用いる植物、カジノキのように製紙に用いる植物などもみられる。カジノキは現在、鑑賞樹木としては用いられないが、平安時代の住宅跡からよく検出される。当時は貴重品であった紙の原料であるとして親しまれたむきもあったのではないだろうか。

遣水は一種の水路であり、ここへは屋敷外からの流入物も多く含まれたであろう。よって、これらのデータは嵯峨院邸内の植栽のみを反映させたものとは限らないのであるが、この院が周囲の自然・地形眺望をもとりこんだ存在であったことから、周囲の自然植生をふくめた植栽復原にかかわる貴重なデータであるといえる。

2) 平安京右京三条3坊3町住宅の植栽

同様の調査を行った事例としては、平安京右京三条三坊三町の邸宅跡の調査がある。三条三坊といえば大臣級の住宅にあてられたものと推定される。その住宅北端の井戸と溝から検出された植物遺存体の分析を一覧にしたものが表2である。時代は遺物からみて10世紀初頭までと推定される。

針葉樹ではモミまたはツガ属、ヒノキが検出されている。

常緑広葉樹については、カシとクスがある。

落葉広葉樹ではナシ属、キイチゴ属、ウメ、スモモ、モモ、サクラ亜属、センダン、エゴノキ、クサギ、ガマズミ、ゴマギ、ハンノキ、ナラガシワ、ムクノキ、エノキ、クワ、カジノキ、サンショウ、イヌザンショウ、カラスザンショウ、アカメガシワ、カエデ属、ブドウ属、ムクロジ、サルナシ、マタタビが検出されている。

では次に、これらの植物に対する当時の鑑賞態度について検討してみたい。平安時代の美意識を探るには、王朝文化人の言動を手掛かりとすることがひとつの方法である。ここでは『枕草子』¹³⁾を中心に、いくつかの樹木について考えてみたい。もちろん『枕草子』がすべての王朝文化人の美意識を反映しているわけではないが、植栽植物に対して当時の文化人のもっていた意識の一つの断片は窺うことができる。

『枕草子』35段は「木の花は」で始まる、花の目立つ樹木についての文章で、紅梅、桜、藤、橘、梨、桐、棟がとりあげられ、また38段は「花の木ならぬは」で始まり、楓、桂、五葉、たそばの木、檀、寄生木、榊、楠、桧、あすはひ、ねずみもち、棟、山橘、山梨、椎、白樺、ゆずり葉、柏、桜櫨がとりあげられている。

まず針葉樹についてである。モミは京都に自生しており、当時は住宅にも植栽されていたが、その後あまりつかわれることはなかったようである。江戸時代初期、古田織部が露地（茶庭）において盛んに用いたがこれは異

風と見られていたようである。明治になって山県有朋が京都南禅寺・無隣庵に導入し、その影響から植治こと小川治兵衛が盛んに用いていたことは良く知られており、現在の京都の住宅においても散見される。ヒノキは、枕草子38段で「またけ近からぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもおかし。五月に雨の聲をまなぶらむをあはれなり」とあり、あまり棟近くには植栽されなかったようである。そして、その鑑賞態度は漢詩の言を引用しての姿勢であった。

常緑広葉樹について、クスは同じく枕草子38段で「楠の木は、木立おほかるところにも、ことにまじらひ立てらず。おどろおどろしき思ひやりなどうとまじきを、千枝にわかれて戀する人のためしにいはれたるこそ、たれかは數を知りていひはじめけむと思ふにをかしけれ」とあって、恋する者の心が千々にくだけ思い乱れ悩む姿を仮託するものとして挙げられている。その元になった和歌は『古今六帖』二、『夫木抄』二十二の「和泉なるしだの森の楠の木の千枝にわかれてものをこそ思へ」であるとされる¹⁴⁾。ここでは既応の和歌に詠まれたクスへの心情を思い浮かべ、鑑賞している姿が窺える。

このように、平安貴族のなかには、個々の植栽植物についての情感—シンボルとしての意味付け—が介在していたと考えられる。

そのような情念の仮託対象としての植栽が、寝殿造住宅の主庭において再現される自然景観の構成要素としてなされる場合があったようである。これは、史料の性質上からくる特性であるかもしれないが、たとえば、絵巻物では動物・植物・気象といった自然に関する事物は、登場人物の心情に密着した風情で描かれる。『北野天神縁起絵巻』別離の段においては、菅原道真が筑紫に赴く直前に庭前に咲き誇る紅梅との別離を惜しむ情景が描かれている。紅梅は画面上に大きく描かれており、道真の往時の勢いを示すように咲き誇っている。打って変わって左遷のあわれさに嘆く道真の心情を強調する対比的な紅梅の表現である。このように植物に託して心情を表現する方法は和歌や日記文学に数え切れないほどに出現する。このような個々の行動事例が先例となって、特定の花鳥風月にある心情の仮託のパターンができあがる例も少なくなかったであろう。

たとえば、ある儀式中、邸宅内の池を舟で巡るとき、中島のマツにフジの花がかかる姿をとらえ、歌が詠まれた。マツには常に青い葉を保っていることから永遠性という暗号めいた意識が広くもたれている。これにかかり咲き誇るフジは藤原摂関家を象徴している。両者を組み合わせ、藤原家の全盛と永代を称える歌とされたのであり、このことが逆に、藤原家にとってマツにフジの取

表2 右京三条三坊 植物遺体分析(木本)

	和名	樹高(m)	花期(月)	2次井戸	2次構	3次構最下層
針葉樹	モミ or ツガ属	45	5	○	—	—
	ヒノキ	30	4	○	○	—
常緑広葉樹	カシノキ* 1	20	4-5	—	○	—
	クスノキ	20	5-6	○	○	—
落葉広葉樹						
(花木)	ナシ属	25	4	—	—	○
	キイチゴ属* 2	2	5-6	○	—	○
	ウメ	10	2-3	○	○	○
	スモモ	8	4	○	○	—
	モモ	5	4	○	○	○
	サクラ亜属	25	4	○	○	○
	センダン	30	5-6	○	○	○
	エゴノキ	7-8	5-6	—	○	—
	クサギ	8	8-9	○	○	—
	ガマズミ属* 3	2-4	5-6	—	○	—
(その他)	ゴマギ	2-7	4-5	—	○	—
	ハンノキ	15	11-3	—	○	—
	ナラガシワ	25	4	○	○	—
	ムクノキ	20	5	○	○	—
	エノキ	20	4	○	—	—
	クワ	12	4-6	○	○	—
	カジノキ	16	5	○	○	—
	サンショウ	3	4-5	○	—	○
	イヌザンショウ	2	7-8	○	○	○
	カラスザンショウ	7	7-8	○	○	○
	アカメガシワ	10	7	○	○	○
	カエデ属* 4	12	5	—	○	—
	ブドウ属* 5	ツル		○	○	○
	ムクロジ	18	6	—	○	—
	サルナシ	4	5-7	—	—	○
	マタタビ	ツル		○	—	—

(注) 樹高, 花期は「原色日本植物図鑑木本編」による。

(注) * 1 カシノキの樹種は不明であるがイチイガシを参考とした。

(注) * 2 キイチゴ属はナワシロイチゴを参考にした。

(注) * 3 ガマズミ属はガマズミを参考にした。

(注) * 4 カエデ属は京都周辺に多い, 紅葉の美しいイロハモミジを参考にした。

(注) * 5 ブドウ属はエビツルを参考にした。

右京三条三坊の庭園樹の出現の比較

木本の性質	2次井戸(%)	2次構(%)	3次構(%)
常緑針葉樹	2科2属2種(9.5)	1科1属1種(4.5)	0種(0)
常緑広葉樹	1科1属1種(4.8)	2科2属2種(9.1)	0種(0)
落葉(花木)	3科4属7種(33.3)	5科5属8種(36.4)	2科4属6種(50.0)
(その他)	7科10属11種(52.4)	9科10属11種(50.0)	4科5属6種(50.0)
合計	13科15属21種(100.0)	16科17属22種(100.0)	6科9属12種(100.0)

り合わせは吉祥の植栽となり、ひろく行われるきっかけとなったことは想像に難くない。

小 結

以上考察してきたように、寝殿造住宅においてハレの空間においてなされる植栽の特性は、基本的には儀式を念頭においたものであったといえよう。その中には、唐制にもとづくいわば機能植栽とでもいうべき植栽と、自然風景を再現するための植栽がみられた。後者のなかには個々の植物に対して抱く共通の情感に基づいてなされる心情仮託の植栽がもりこまれるが、それはケの空間、たとえば壺庭における植栽とも大きくかわり、成立するところがあったものと思われる。このことについては稿を改め検討してみたい。

ケの空間においていかなる植栽が行われていたかは判然としませんが、埋蔵文化財調査によって食用・薬用ならびに工業用を目的とする植物が多く検出されていることから、そのような意図をもつ薬草園などの空間が設定されていたとも考えられる。このことは、寝殿造住宅のゾーニングと深く関わる課題である（これに関連していえば、植栽のなかには空間区分の用途をもつものもある）。いずれにせよ渡来植物の多くはもともと薬用としてもたらされたものであり、その中で鑑賞用にピックアップされたものも少なくなかったものと思われる。

摘 要

日本の寝殿造住宅における植栽の特性について、文献資料および遺跡からの植物遺存体の分析結果をもとに検討・考察した。第1章では平安時代中期、王朝政治の舞台のひとつとして大きく発展をとげた寝殿造住宅、特に園池を中心としたハレの空間における植栽について、文献史料から考察した。それは当時醸成された国風文化を背景に行われた儀式の性格を反映し、自然風景の再現を目的とするものであった。その萌芽は平安時代初期の離宮においてもみられたが、その本格的な成立は寝殿造庭園の成立をまたねばならなかったものと推測される。第

2章では平安時代初期の離宮・嵯峨院と、平安時代中期の貴族住宅・平安京右京三条三坊三町住宅の発掘調査において行われた植物遺存体調査の結果から、それぞれの植栽の特性について考察した。

謝 辞

本考察において、大覚寺の発掘調査結果については奈良国立文化財研究所の本中 真氏、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏から貴重なご教示を受けた。

岡田氏からは平安京右京三条三坊三町についてのデータも提供して頂いた。ここに記し、謝意を表します。

引用ならびに参考文献

- 1) 仲 隆裕 (1987)：「成立期における書院庭園とその植栽に関する研究」，千葉大学大学院修士論文，ほか。
- 2) 沢田名垂 (1842)：『家屋雑考』，今泉定介他編 (1928) 増訂故実叢書，吉川弘文館・日用書房，東京。
- 3) 堀口捨巳 (1978)：『書院造りと数寄屋造りの研究』，鹿島出版会，27-32，東京。
- 4) 村岡 正 (1979)：「日本庭園」，『造園技術大成』，養賢堂，東京，147。
- 5) 太田静六 (1987)：『寝殿造の研究』，吉川弘文館，東京，57-59。
- 6) 大鏡：日本古典文学全集 20，小学館，東京，1974，121-122。
- 7) 本中 真 (1983)：寝殿造住宅庭園における眺望行為，造園雑誌，47 (2)，119-133。
- 8) 広川勝美編 (1978)：『源氏物語の植物』，笠間書院，東京，298-300。
- 9) 森 蘊 (1986)：『作庭記の世界』，NHK ブックスカラー版，日本放送出版協会，東京。
- 10) 安良岡康作訳注 (1984)：『現代語訳対照徒然草』，旺文社，東京。
- 11) 斎藤正二 (1979)：『植物と日本文化』，八坂書房，東京，9-19。
- 12) 『続日本後記』承和3年 (836)：7月21日の条。
- 13) 田中重太郎訳注 (1988)：『枕草子』，旺文社，東京。
- 14) 同上，410。